

## ターリンで誕生日

Tamara KALANTAR

川崎燎という名前の申請者に、ターリンへの長期滞在許可証が交付されたのは、厳格な入国管理局の役人の心を揺さぶった結果なのか、それは決して分からない。しかし、もしこの役人がジャズ・ファンであったなら、おそらく心が揺さぶられていたに違いない。

この素晴らしいミュージシャンは、それまでニューヨークに30年間住み、40にも及ぶアルバムを収録したが、何か新しいことが必要と感じ、2年前にニューヨークをあとにして、当地に移り住んだ。彼は、ヨーロッパでこの新しいものを探し始め、ターリンでそれを見つけたのだ。ターリンの彼の部屋には、マイクロホンが立っていて、棚には本が山のように積み上げられている。彼は、ここから車と飛行機でコンサートに出かけている。（ところが、彼の言葉を借りると、演奏するのは、クラブでも、カーネギー・ホールでも、同じくらいに大事だという。）



川崎燎(彼のアーカイブから)

彼の過去・現在の共演者リストを見るだけでも、それはまるでスターの万華鏡のようで、頭がくらくらする。彼はBBキングと共演し、カーネギー・ホールに出演したと言え、それだけで十分だろう。しかし、川崎は、彼が生まれ育った日本でプロのミュージシャンになったのだ。大学での彼の師は、数学でノーベル賞候補に推薦された教授。また当時から数学に関する本が、彼の愛読書であった。

川崎燎は、東京の大学で量子物理学を専攻し学士号をとった22歳には、日本における正真正銘のジャズ・スターになっていた。彼は、CMソングからポピュラー・ソングまであらゆる音楽を録音した。その間日本で彼の参加したレコードの数は、膨大な数を記録した。彼は一度も自らプロデューサーを探すことなく、いつもプロのプロデューサーから依頼されて自分の作品を制作する機会に恵まれていた。1973年、彼が26歳になったとき、日本ではこれ以上ジャズについて何も学ぶものはないと、ニューヨークに渡る決心をした。彼自身が認めている通り、彼は学ぶことはとても好きだが、ジャズは、机に向かって学べるものではなく、自分の才能を見抜き、偉大なミュージシャンの側で技量に磨きをかけて、向上させるものだと、川崎は考えている。

彼のアメリカでの生活は、出迎えた友人に空港から直接リンカーン・ジャズ・センターに連れて行かれ、その夜、ジョー・リー・ウィルソンの舞台に引っ張り出されたことから始まった。川崎は、すぐにそのグループに加入し、ウィルソンと、さらにフルート奏者のボビー・ハンフリーとも定期的に共演し始めた。数ヶ月後、本当の衝撃が彼を待ち受けていた。ある日、彼が散歩から戻ると、マンハッタンにある彼のアパートの扉の前で、最高のミュージシャン、ギル・エヴァンスが待っていて、自分のオーケストラに川崎も参加して欲しいと依頼したのだ。

川崎は、何よりもまずギタリスト、ジャズとアシッド・ジャズの名手として有名である。しかし、彼は、かなり数多くのダンス・ミュージックを作曲し、ヒップ・ホップやブラジル音楽でも活動し、ヒットしたポピュラー・ソングのレコードも発表している。彼は、コンピュータ・プログラムを書き、ビリヤードに興じ、天文学の愛好家でもあり、編曲家でもあり、文字

通りそれを科学的な基礎に取り入れながら、録音装置を使って実験的なことをやっている。いま彼が関心をもっているのはアコースティック・ミュージックで、何よりもそれに注力しているのだ。

彼は、まるでガラス吹き職人が、炎で真っ赤に溶けたガラスの塊を膨らませるように、自分の聴衆にエネルギーを吹き込んでいる。彼の音楽は、簡潔で、濃縮されており、音は澄んでいて、完璧で、他の音とは際立っている。あたかも15世紀ルネッサンス期の聖母マリア像の指が弾いているかのようだ。

彼の理論はシンプルで、ミュージシャンとその楽器は完全に一体になるというものだ。彼は、文字通りギターを廻って、彼自身は自分の楽器より太くならず、自分のからだの中にそれを埋め込み、しかも面をして、音を探しながら、目指す音符をつかんだ時には、その音は、それ以上に的確なものは何もあり得ない。彼は、音について控眼目している。というのは、聴いている人の各々が、この音楽を自分の中で完成できること、またその音楽は各人固有のものになることを、彼は知っているからである。ギタリストの彼は、ただ種と蓄みを放り投げるだけで、それがやがて芽を出し、まったく独自の花を開かせることになる。音楽が音となって響く時、それはミュージシャンが生み出し、考え付いたものではないと、彼は言う。我々の宇宙は振動し、地球自体が振動しており、空中には何か漂っているので、優れたミュージシャンは、これを捕まえなければならない。小さなアンテナとなって、空中に漂っているものを感じとって、何か他の人たちに分かるようなものに転換すること、それが彼の使命でもある。

優れたジャズ、それは、自分が何をするのも分からず、自分の楽器にも触らないときに出来るものだ、と川崎は言う。これには知性も、すばらしい演奏技術も必要で、それを真剣に試すのがまさに音楽である。とはいえ、3分間の作曲をする前に、何週間もそれについてじっくり考えることは、彼にはよくあることだ。

彼は、ターリンで、“Trio Kawasaki”と共に《Reval》というアルバムを収録した。この作品には、ベースにトイヴォ・ウント、ドラムにアイヴァル・ヴァシリエフ、イングリッシュ・ホルンにクリスティー・キールが参加している。また、川崎は、《エストニア》劇場向けのジャズ・バレエの製作に参加した。その振付は振付士ラツセル・アダムソンが担当している。いま彼は、トイヴォ・ウントとアメリカ人のブライアン・メルヴィン(彼もターリンに住んでいる)と組んで、いくつかのプロジェクトに取り組んでいる。そのプロジェクトの一つは、偉大なアメリカの作曲家・ピアニストのキース・ジャレットに捧げたものである。(エストニアの)シラマエで行われたジャズ・フェスティバルに参加した若者たちは、マスター・コースでギタリスト川崎の指導を受けた。

彼は、ターリンから、定期的にフェスティバルに参加するため、スカンジナビア、カナダ、日本にまで出かけている。最近、彼が演奏した国には、ラトビア、ウクライナ、ロシアがある。

彼の譜面台の上にはロシア語のアルファベット一覧表が置いてある。その表の各文字の下にはカタカナ(日本の表音文字の一種)が書かれている。日本語とロシア語の発音には共通点が多いので、英語でロシア語を学ぶより、日本語で学ぶ方が容易だ、と川崎は言う。

2月25日、彼の旧友たちも新しい友達も、このミュージシャンの誕生日を祝う。